

当院における人工骨頭置換術の検討

市立敦賀病院 整形外科

柳下信一 朝田尚宏 田尻和人 重本顕史 山田義夫

Hemiarthroplasty for the treatment of femoral neck fracture in the elderly: postoperative results.

Key words; femoral neck fracture, Hemiarthroplasty, postoperative results

【はじめに】超高齢化社会の到来に伴い、これまでは問題になることが少なかった大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換術後のゆるみの発生が最近当院でも散見されるようになった。H19年の本研究会でも、人工骨頭置換術後の著明な骨欠損に伴うステム側のゆるみに、大腿骨骨折を併発したため、再置換術を余儀なくされた認知症患者の2例について報告を行った。こうした症例を踏まえて、今回はこれまで当院で大腿骨頸部骨折患者に対して施行された人工骨頭置換術について調査し、今後の方針について検討を行った。

【対象】2001(H13).1月～2004(H16).12月の間に、大腿骨頸部骨折患者に対して人工骨頭置換術を行った41症例（男性4例、女性37例）、手術時年齢は50～94歳（平均年齢77歳）、使用機種は京セラPerfixセメントシステム34例、同セメントレスシステム（HAコーティング）3例、Stryker EXETER 4例、手術進入法は全例後側方進入であった（表1）。

対象

H13 (2001).1月～H16 (2004).12月までに、
大腿骨頸部骨折患者に対して人工骨頭置換術を
行った41症例（男性4例、女性37例）

手術時年齢：50～94歳（平均年齢77歳）

使用機種：

京セラPerfixセメントシステム 34例、
同セメントレスシステム（HAコーティング）3例
Stryker EXETER 4例

手術進入法：全例 後側方進入

表1

【検討項目】全41症例における、現在の状態（生存・死亡）、術後 follow up の有無を、また1年以上術後経過観察が可能であった24例に対して、レントゲン所見（ゆるみや脱臼の有無）について検討を行った（表2）。

検討項目

(1) 全41症例に対して

- ・ 現在の状態（生存・死亡など）
- ・ 術後 follow up (F/U)

(2) 1年以上の術後経過観察可能な24例に対して

- ・ レントゲン所見（ゆるみや脱臼の有無）

表2

【結果】現在の状態について、生存例が19例（術後生存期間は3年11ヶ月～7年6ヶ月、平均5年7ヶ月）、死亡例が19例（術後生存期間は5ヶ月～6年4ヶ月、平均2年9ヶ月）、消息不明が3例であった（図1）。

現在の状態（全41例）

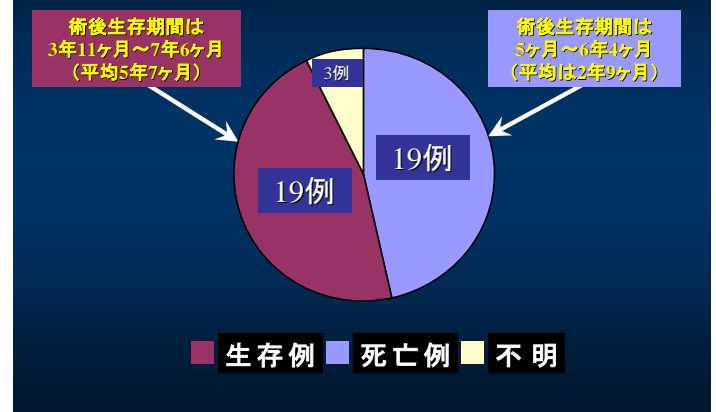


図1

術後（退院後）follow up 期間について、1年以上のレントゲンを含めた follow up ありが24例（経過観察期間は1年2ヶ月～7年5ヶ月；平均4年7ヶ月）であった。また、1年以内の症例が17例で、そのうち6例が1年以内に死亡していました。一方、1年以上生存していた症例も8例存在し、うち1例は現在も生存しています。結局、術後全く follow up されていなかった症例は13例、32%であった（図2）。

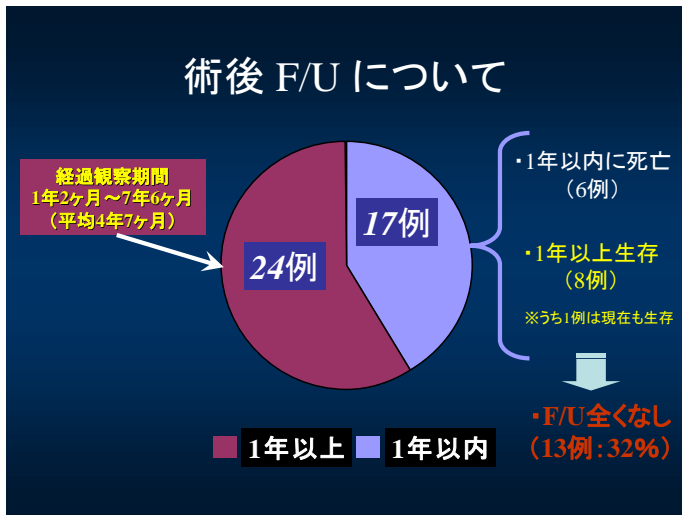


図 2

1年以上レントゲンを含めた follow up ができた 24 例について、レントゲン所見を検討したところ、ステムのゆるみを 4 例に、脱臼を 1 例に認めた。ゆるみを認めた 4 例はすべて京セラセメントステムを使用しており、また透析患者が 2 例含まれていた。ゆるみの 1 例には再置換を行った。なお骨頭の central migration は認めなかった (図 3)。

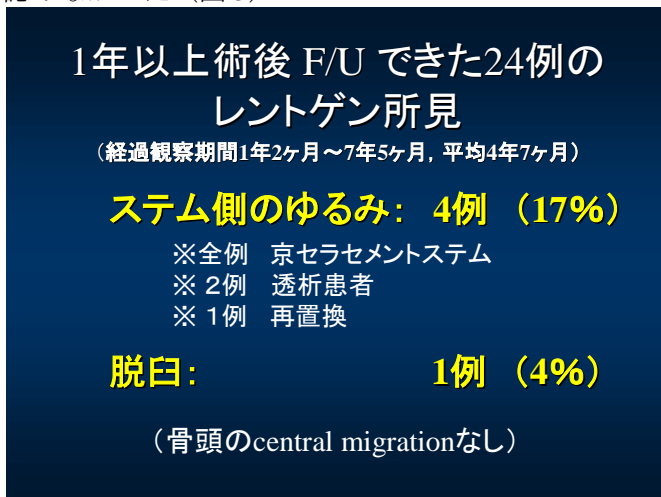


図 3

【症例提示】症例 1 : 81 歳男性, 透析患者. 術後 4 年の現在, ステムの全周性のゆるみを認めている. 歩行時の大腿部痛も認めているが, 患者は再置換を希望されず, 経過観察中である (図 4)。



図 4 : 症例 1

症例 2 : 78 歳女性, 脱臼例. 重度の認知症も伴っており, 術後の follow up がほとんどされておらず, 数年ぶりの来院であった. ここ数年前から, 股関節の屈曲・内転・内旋肢位で固まっていたようで, 膝関節の拘縮も強く, 脱臼についてはこのまま放置とした. 術後の follow up の必要性を改めて感じさせる症例であった (図 5a,b)。



図 5a,b : 症例 2 a / b

【考察】

1) 現在の状態について

術後の生存期間は, 生存例で平均 5 年 7 ヶ月, 死亡例で平均 2 年 9 ヶ月と, 生存例が長いことは想像にたえないが, 死亡例の中にも最長で 6 年 4 ヶ月の生存例が存在しており, 生死にかかわらず術後はある程度の生存期間が見込まれることから, 術後の follow up は必要であると思われた。

2) 術後 follow up 有無について

退院後の follow up が全くされていない症例が 13 例 (32%) も存在した. この理由として, 患者側のみならず医療者側にも follow up が重要であるという認識が低いのではないかとと思われた. 術後早期に死亡する例など, やむをえない理由で再診できない例が存在することを踏まえても, やはり follow up の重要性を訴える必要があるのではないかとと思われた。

3) レントゲン所見について

ステム側のゆるみを 4 例/24 例 (17%, 全例京セラ製セメントステム) に認めたことは、通常より高率であると思われた。その原因としては、(1) セメント使用機種の問題 (セメントテクニックの問題やステム表面の粗面加工の問題)、および (2) 透析患者の問題 (骨質低下、比較的若年者で活動性が高いこと) が考えられた。

4) 当院での今後の方針について

現在、使用機種として、H16.6 月からセメント EXETER ステムや H18.4 月からはセメントレスステムを選択している。また、手術法として、H16.10 月から後方アプローチでの外旋筋群・関節包強化修復法を追加しており、さらに H19.12 月より症例に応じ

て DAA を採用している。

【結論】

- ・大腿骨頸部骨折患者は、術後もある程度の生存期間が見込まれるため、術後の follow up は必要である。
- ・使用するセメントステムの表面が粗面加工である場合や、患者が透析を受けている場合には、ステムのゆるみが早期に発生する可能性がある。